木曽ヒノキの有利採材について
～６ｍ材と５ｍ材の比較について～

木販・貯材第二係　○三浦　文人
販　売　係　　中島　茂人

要旨

木曽ヒノキについては５ｍ採材が基本であるが、良材については努めて長材を生産し、販売する傾向にある。一方、多くのユーザーから長材、なかでも６ｍ材については慎重に行ってほしいとの意見も寄せられている。このため、６ｍ採材と５ｍ採材の有利性を比較するため、ほぼ同じの等級、径級の複数の材を５ｍと６ｍに分けて一般公売で販売した。その結果、両者の販売単価には大きな差がないことがわかった。

はじめに

木曽ヒノキの良材大径木の長材は希少価値があり、神社仏閣用材などとして極めて高い価格で取引されている。したがって、木曽ヒノキについては５ｍ採材が基本であるが、良材については努めて長材を生産し、販売する傾向にある。

一方では、多くのユーザーから長材、なかでも６ｍ材については慎重に行ってほしいとの意見も寄せられている。

このため、６ｍ採材と５ｍ採材の有利性を比較するため、ほぼ同じの等級、径級の複数の材を５ｍと６ｍに分けて一般公売で販売した。その結果、両者の販売単価には大きな差がないことがわかった。

１　調査の方法

ほぼ同じの等級、径級の複数の材を５ｍと６ｍに仕分けし、それらの販売単価を比較した。比較に際し、時間的・人為的誤差を避けるため、次のような条件下で調査した。調査は等級別に２回行った。

（一回目の調査）

①販売時期：平成４年１２月１６日及び平成５年１月９日の一般公売
②産　　地：上松材（同じ団地から集材されたヘリ材）
③品　　等：元玉３等材が主
④検　　知：上松木材販売所　上松土場
⑤径　　級：40㎝～58㎝

（二回目の調査）

①販売時期：平成５年５月１９日

②産　　地：上松材（中の沢）

③品　　等：元玉４等材が主

④検　　知：上松木材販売所　焼笹土場

⑤径　　級：50cm～62cm

2　販売結果

木曽ヒノキ６ｍ材と５ｍ材の販売結果は次の表の通りである。

＜１回目の調査＞

	6　m　材	5　m　材
販売本数	１７　本	１３　本
販売件数	8　件	5　件
平均末口径	47.0　cm	47.2　cm
総材積	23.549　㎥	14.470　㎥
販売額	17,663　千円	10,963　千円
販売単価	750　千円/㎥	758　千円/㎥
径級補正単価(注)	**754　千円/㎥**	**758　千円/㎥**
応札枚数（平均）	7.1　枚	9.2　枚

注）径級と単価には極めて強い相関があることから、両者の径級の差による補正を行った。

＜２回目の調査＞

	6　m　材	5　m　材
販売本数	5　本	6　本
販売件数	3　件	3　件
平均末口径	52.9　cm	55.1　cm
総材積	8.701　㎥	9.106　㎥
販売額	5,416　千円	5,989　千円
販売単価	622　千円/㎥	658　千円/㎥
径級補正単価(注)	**659　千円/㎥**	**658　千円/㎥**
応札枚数（平均）	5.7　枚	6.0　枚

注）径級と単価には極めて強い相関があることから、両者の径級の差による補正を行った。

販売結果のポイント

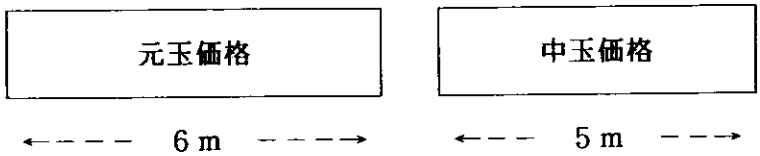
①６ｍ材と５ｍ材の販売単価に差はない。

②公売の応札枚数は６ｍ材のほうが５ｍ材に比べて若干少ない。

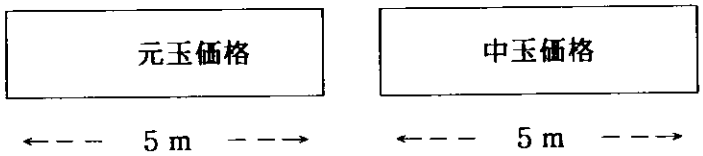
4　推測される６ｍ採材のメリット

（１）６ｍに採材された元玉の場合、元口から５～６ｍ間の１ｍ部分について元玉価格で販売できる。このため、５ｍ材と同じ単価であっても元玉で販売できる量が多いため総体的には収入確保につながると予想される。

＜元玉６ｍ採材の場合＞



＜元玉５ｍ採材の場合＞



（２）６ｍ材と５ｍ材では求積方法が異なり、完満な材なら６ｍ材のほうが販売側にとって有利である。ただし、うらごけの場合は販売側にとって不利である。

＜６ｍ材の材積計算＞

$(D+1\text{cm})^2 \times L$　　Ｄ：末口径、Ｌ：材長

＜５ｍ材の材積計算＞

$D^2 \times L$　　Ｄ：末口径、Ｌ：材長

5　推測される６ｍ採材のデメリット

（１）聞き取り調査によれば、６ｍ材は１５尺～１８尺（４．５～５．４ｍ）の製品の特別注文等が入ったときに必要になるということである。しかし、大径良材の場合、通常の規格品を生産するには５ｍ採材が最も適しているということである。この聞き込みを裏づけるように、公売の応札枚数も６ｍ材より５ｍ材

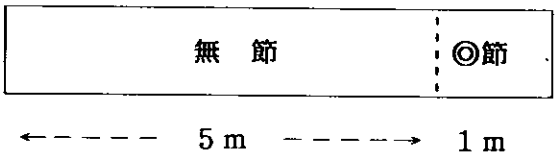
の方が多い。

これらのことから、６ｍ材はあくまで特殊寸法で多くの需要は見込めないことが推測される。

（２）６ｍ採材を行うと５ｍ材に比べ等級が１ランク下がることもあることを考慮しなければならない。

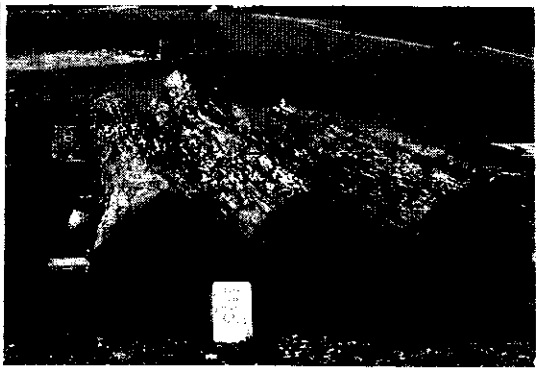
例えば、元口から５ｍ～６ｍの間に節や曲がりなどの欠点があった場合、５ｍに採材する場合より等級が落ちる可能性がある。

＜等級が下がるような例＞



おわりに

今回の調査結果から、大径良材の６ｍ採材については、５ｍ採材に比べ販売価格の面で若干有利性が認められるものの、ユーザーの需要が少ない等を考慮すると、６ｍ採材は厳選して行ったほうがよいことがわかった。

木曽ヒノキの大径良材は、生産量の減少、生産箇所の奥地化による品質の低下等に伴い、その希少性が高まっている。このため、大径良材をいかに有利に販売していくかは収入確保の上から極めて重要である。なかでも採材方法は直接価格に反映する大切な課題の一つである。

今後とも、より有利な採材方法について調査を続けていきたい。